＊連載「地域再生」―そこにしかない「人」と文化の価値⑤

地域は「住み続けたい」想いで存続する

―誰が、美しい町を守るのか・山形県金山町―

福田　志乃　地域経営コンサルタント（地域政策プランニング代表）

金山町との"不思議な縁"

山形県金山町は、山形新幹線の終点・新庄駅を下車して車で三十分のところに位置する最上川支流の農山村地域である。春には農地や山々が新緑に染まり、花々が地域を彩る。雪の中から顔を出したフキノトウ、山菜尽くしの御膳。秋には、澄み切った空気とキノコ三昧の食卓……。さらに言えば、日本国中で目に付く、工事現場やコンクリートの風景が少ない。都市部では失われた「日本の故郷」を想わせる風景や味覚が、この町には生き続ける。

筆者が金山町の名前を知ったのは十年前。時代はバブル経済が頂点から下り始めた時だった。全国どこの地域でもリゾートと称した大規模開発が進み、どこも同じ顔をした駅前整備がなされ、ホテルやショッピングモールが乱立していた。多くの山村や農村でも集客を見込んだリゾート開発が進み、山々の斜面が切られ、農地が巨額の価格で売買されていく。そんな時、建設省（当時）のまちづくりに関する研究会で、「真に、美しいまちづくりとは何か？」が問われたのである。委員の中には、補助金を入れて区画整理で一気に仕上げた街区が美しい、という意見もあった。しかし、議論を重ねるにつれ、「そこにしかない生活や文化の価値を生かしているまちづくりが美しい」との結論に落ち着いていった。そして、そうした地域の共通の特徴として、

◆「美しい」との評価が確立されるまでに、何年、何十年もの長い時間がかかっていること

◆住民や関係者や行政が一体となって取り組んでいること

◆取り組みを継続させる「人」が地域の内外にいること

◆結果的ではあっても、景観形成が目的化せず、地域で暮らし働く人々がそのまちに愛着や誇りを持っていること

――などが見えてきた。

その時に名前が挙がった町村の事例として、岐阜県古川町（本誌２００２年９月30日号で筆者が紹介）、長野県小布施町（同年10月７日号で筆者紹介）とともに、今回紹介する金山杉と金山職人により、綺麗な街並みを地域ぐるみで創り守っている金山町があった。

◇　◇

先の建設省の研究会では、筆者はレポートをまとめるコンサルタント側のチーフだった。その後、『地域のこころ』を伝えたいと六年前から書き続けてきた本誌の連載で「そろそろ金山町を」と考えていたころ、国土交通省の地域経営の研究会で筆者自身が委員となり、海外や日本各地の自治体の調査に参画する機会を得た。その訪問先の一つが、偶然にも金山町だったのである。

研究会委員として二〇〇三年十二月に訪問した時、筆者にとっていちばん印象的だったのが、「金山町にバブルは来なかった。『バブルって、どこの国の話？』と思ったくらい、地価も上がらなきゃ、人も来なかった」という職員さんの言葉だった。町の人たちは、「そのくらい、田舎なのよ」と言って明るく笑う。そこには、全国一律の

経済優先の尺度もなければ、建設系の公共事業で豊かになろうという価値観もない。筆者は、これまで百数十もの自治体に関わり、多くの地域で『価値』を喪失している実態を見てきたがゆえに、金山の〝欲の無さ〟には、驚きや不思議、新鮮さまで感じたほどだ。「なぜ、何を信じて、地域の人がここまで純粋でいられるのか」――が、筆者の金山取材の関心事となった。

ところが、その後、金山町の松田貢町長にお会いする機会があり、筆者は単なるジャーナリスト活動で同町に立ち寄るだけでは済まなくなった。松田町長から、金山町が「合併しない道」を選ばれたと聞かされ、①厳しい選択の中で、景観的な美しさだけでなく、産業や福祉もトータルに考える新たなまちづくりに取り組まれること②役場内では助役も収入役も置かず、課長たちを筆頭にプロジェクト型の横断体制を目指しつつ、職員の働き方も見直されること③町民の〝輝く取り組み〟はたくさんあるが、それらも町民みんながお互いを尊重できる形でさらに進めていきたいこと④一歩引き下がる女性たちが、男性と等しく語り行動するようになってもらいたいこと――などのお話を伺い、この一年間は、筆者自身が地域経営コンサルタントとして金山町に通う重責を担わされてしまったのである。

『百年運動』を支える町民の想い

図表5―1を見ていただきたい。これは、金山町が受けた数々の賞である。景観、街並み、住宅、建築、デザイン関連の賞が並んでいることで分かるように、どちらかというと、〝ビジュアル系〟が多い。

しかし、十数年前に全国で大流行した〝景観条例〟によって形だけの街並みをつくろうとした、多くの自治体や地域は成功を収めていない。この現実に鑑みると、金山町では、地域の人々がいかに〝街並みづくり〟を自分たちの生活の一つと捉え、大切に考えているかが見えてくる。

図表5－1　金山町の景観関係表彰・受賞歴

（1985年度以降）

受賞年月日	コンクールの名称	受賞名	主催者等
1986.3.31	第1回美しい都市づくり賞	優秀賞	(社)経済同友会
1989.11.28	第4回農村アメニティーコンクール	優良賞	国土庁 (財)農村開発企画委員会
1991.9.27	活力ある美しいむらづくりコンクール	最優秀賞	農林水産省 (財)21世紀むらづくり塾
1991.11.14	第4回美しい街並み賞	最高賞	山形経済同友会
1992.5.28	農村景観百選	認定	農林水産省
1992.7.10	手づくり郷土(ふるさと)賞	手づくり郷土賞	建設省
1995.10.4	都市景観大賞	都市景観百選	「都市景観の日」実行委員会 建設省
1996.7.10	手づくり郷土(ふるさと)賞	手づくり郷土賞	建設省
1998.11.10	第6回やまがた景観デザイン賞	県知事賞	山形経済同友会
1999.2.27	第14回公共の色彩賞	環境色彩10選	公共の色彩を考える会
2000.8.25	人間道路会議賞	人間道路会議賞	人間道路会議 東北地建後援
2001.3.9	「毎日・地方自治大賞」	最優秀賞	毎日新聞社
2002.5.30	日本建築学会賞	業績賞	(社)日本建築学会
2003.10.2	第15回「住宅月間」	功労者 国土交通大臣賞	国土交通省
2003.10.16	HOPE計画20周年記念特別表彰	HOPE大賞	HOPE計画推進協議会
2003.10.30	2003年度グッドデザイン賞	環境デザイン	(財)日本産業 デザイン振興会

「金山杉」と職人技術の価値

役場の資料には、一九六三年には「全町美化運動」が提唱され、住まう地域の環境づくりのコンセプトが確立したとある。七〇年代後半には、木材のブランド「金山杉」を使い、かつ、金山大工の〝腕〟による金山構法を活かした、金山らしい伝統的な建物による景観づくりの重要性が東京芸術大学の関係者らにより提唱され、公共建築物を中心に金山の街並み保存運動が始まる。

しかし、街並み保存運動の始動とは裏腹に、七〇年代には安価な建材の海外からの大量輸入が進み、国内産の優れた高価な木材が市場から締め出され、林業はもはや生業ではなくなってきていた。さらに、金山大工の仕事も市場の縮小とともに減少し、大工の高齢化もあって、金山職人の〝伝統的な技の継承〟が大工たちの間でも深刻な問題となり始めた。

このような地場産業の継承と街並み保存運動とを総合的に展開する取り組みとして、七八年、町は建築物を表彰するコンクール制度を発足させた。換言すれば、コンクールには「大工の存在や価値を地域ぐるみで誇る」セレモニー的な意味がある。

金山杉は時間をかけて育てるため、一般的な杉に比べて密度が高く素材として堅い。かつては、切り出した後、山で一年以上かけて乾燥させ、製材までに三年を要したそうである。代表的な金山建築とは、**図表5―2**で示すように、白壁、切り妻屋根（こげ茶・黒）、金山杉による梁や柱、壁の美しい意匠による丹精で優美な佇まいが特徴である。

これは、八六年に制定された金山町街並み景観条例による「金山町街並み形成基準」（**図表5―3**）で明文化されている。しかし、綺麗な建築物が所々に点在するだけだったり、一本のシンボルロード沿いの建物の外観だけを繕えたりというのでは、街並みや農山村風景として決して美しいものにはなっていかない。

驚くことに、金山町では景観条例制定後の約二十年間にわたり、年平均約十八軒のペースで個人住宅が条例に沿って建て替えられているという。延べ数でいうと、全世帯数約千八百五十戸の二割に相当する約三百六十戸に上る。「こうした協力的な町民の意識は、どうして生まれたのか」――。その回答は、路地裏を歩いてみて、筆者自身がすぐに見いだすことができた。

町民の意識変革のきっかけ

筆者が最初に町の中心部の路地裏を歩いたのは十二月。真冬で訪れる人もいない時期なのに、水路沿いや庭先に花がたくさん植えられ、綺麗に手入れされていることに注目した。日本では、近年、都市部でガーデニングが定着しつつあるが、地方部で生活・公共空間に花を飾る習慣は少ない。「自分たちのために花を飾る楽しみ」――。これは、必ずや、欧州で町民たちが体得してきたはずだと、筆者は直感したのである。

実は、筆者もテラスガーデニングを手掛けて十年以上になる。きっかけは、学生時代に百万円もの借金をして行った欧州旅行での経験だ。その後も何回も欧州に旅し、音楽や美術や花が、街全体、いや人々の生活全体に溶け込んでいる豊かさを思い知らされる。筆者が社会人になった当時、日本の都市計画といえば、米国の大型リゾート開発技術ばかりを追いかけており、地域の個性を生かした生活文化の重要性からの地域政策を唱える筆者に対しては、「回顧趣味（都市計画の技術屋ではない）」との批判も向けられた。まして、二十～三十歳代で〝花いじり（盆栽）〟とは、老けた趣味だとも笑われた。しかし、ここ二～三年で一気に形勢が逆転。今や、経済志向の米国型よりも、生活文化を尊重する欧州型の〝こだわり〟や生き方が見直され、ガーデニングも日本の都市生活ではすっかり当たり前となった。

図表5－2　代表的な金山建築の住宅

（町中心部）

（農村部）

出典：山形県金山町のまちづくりと建築（2002）

図表5－3　金山町街並み形成基準

〔基本理念〕　町全体を風景としてとらえ、周囲の自然や歴史的資産が美しく見え、かつ住民が住みやすく、風景と街並みが調和する美しい町を形成する。
〔対象地区〕　金山町全域

建築物	位置	道路からの外壁の後退	1．国道、県道及び町道等整備された公道に直接接する敷地 （1）　第一種住居地域及び第一低層住宅専用地域は、原則として、1mの後退とする。 ただし、近隣商業地域内ではこの限りでない。 （2）　工業地域及び周辺街区では、原則として２mの後退とする。 （3）　４m以下の公道に接する敷地では、全面道路中心線から３mの後退とする。 2．整備された公道に直接接しない敷地 （1）　全面道路中心線から３mの後退とする。 （2）　路地状道路の突き当たりの敷地は、道路敷地境界線より３mの後退とする。
		規模	（1）　敷地面積（新築） 原則として、１６５㎡以上とする。 建て替える場合は、現状の敷地面積と同程度の面積を確保するよう努める。 （2）　１戸当たり床面積（新築・改良） （新築） ３０㎡以上とする。 建て替える場合で、２８０㎡超の住宅は、現状と同程度の面積を確保するよう努める。 （改良） ３０㎡以上とする。
	意匠	屋根	1．材料 （1）　積雪寒冷地であることを意識して、鉄板系・ステンレス系材料及び同等品を基本とする。 2．色彩 （1）　美しい風景を引き立たせるために、こげ茶・黒とする。 3．形態 （1）　伝統的な家並みの連続感を保つために、原則として、公道に直接接する場合の大屋根は、切妻で妻入とすること。ただし、下屋はこの限りではない。 良くない形態（例）…陸屋根 ※寄せ棟・入母屋・片流れ・変形切妻は風景と街並みに調和するように配慮すること 4．原則として、大屋根の軒先は、７５cm以上とすること。 ※原則として、主要道路に面する場合は９０cm以上とする。 5．屋根の勾配は、１０分の３以上１０分の５以下を標準とする。
		外壁	1．材料 （1）　杉板張…生地色または風景と調和するオイルステン仕上げ、木材保護着色剤仕上げとする。 （2）　しっくい、プラスター、モルタル等、塗壁とする。 2．色彩 （1）　美しい風景と調和するしっくい、プラスターの白とし、土壁仕上げの場合は風景と調和する自然色とする。 （2）　モルタル塗の場合は、白または土壁仕上げの風景と調和する色彩とすること。 （3）　杉板張りの場合は、美しく古びる素材を生かした仕上げとする。生地色またはオイルステン及び同系色の木材保護着色材などによる風景と調和するものとする。
		構造等	1．在来工法木造住宅とする。 2．高床式の場合は、風景と街並みに調和した構造とする。
建築物以外の工作物	屋外広告物		1．美しい風景と街並みに調和するものとする。 ※風景や街並みにそぐわない広告物は避けること。
	壁等		生け垣等は、次のいずれかとし、原則として、高さは１m前後とする。 1．生垣を設け、自然や風景に調和しやすいものとすること。 （例）杉、カエデ、ウコギ、エゴノキ等。 2．板塀等を設けること。 3．ブロック塀については、ツタ類での被覆等緑化に努めること。 ※既存ブロック塀は圧迫感があり、また、危険と見なされているため、新設する場合には、原則として、０．８～１mまでの高さとし、緑化を図ること。
	水路その他		1．原則として、水路の縁（法面）は、自然石割石積施工とすること。 2．美しい風景と街並みに調和する植栽とすること。

だが、農山村での、地域ぐるみのガーデニング風景は、やはり珍しい。筆者自身の苦い経験に基づいて「町民の皆さんの中に、欧州のどこかの国が理想のモデルとしてあるのでは？」と質問したところ、期待通り町長や職員から「町民のドイツ視察は、今年で十一年目になる」との答えが得られた。その後、実際にドイツへ視察に行った町民の方々からも、「ドイツ人が自分たちの街について話す時、紀元前から語る、その時間のスケールに驚いた。まちづくりは数百年単位で考えることを学んだ」との奥の深いコメントをもらった。

金山町で、住宅建て替えや街並み美化運動（花の手入れ、ごみゼロ運動）が町民の意思で進むのも、町民自らがドイツを視察し、その美しさを体験することで〝理想像〟を共有でき、「日常生活そのものに反映する価値」を多くの町民が理解したからこそできると、筆者は確信した次第だ。

①金山杉や金山大工といった〝そこにしかない文化的価値〟の存在があり、

②欧州視察を通して、建物の美しさや花の美しさ、豊かな生き方を体験・理解した町民たちの地道な取り組みが多数あり、

③多くの賞を受けるなど全国的な評価を得たことが、地域ぐるみの自信や誇りとなり、

④多くの町民が身近な「美しいまちづくり」や「美しく暮らすこと」を模索し続けている

――金山は、そんな素朴な、飾り気のない町である。

この人があって、この取り組みが花開く

都市再生法による規制緩和が東京を中心に活況を取り戻す成果を上げたからだろうか。構造改革特区の動きも具体的になり始めたからだろうか。昨年ごろから、国が地方部の地域再生に力を入れ始めている。一方、地方部の現場で根強く聞かれるのが「地域を思うからこそ、中央から事業（就労機会の種、お金）を持ってくる必要がある」との見解だ。しかし、筆者が拙著『自治体実行主義』（ぎょうせい）や本誌での連載、内閣所管の広報誌上等で指摘し続けてきたように、もはや公共的資金や成功事例の手法を国が一律にマニュアル化して注入したところで、地域再生は叶うものではなくなった。大切なのは、その地域に「住み続けたい」、さらには、その地域で「一生を終えたい」という、〝一人ひとりのアイデア〟と〝自らが行動する気概〟を集結することである。

金山町の魅力は、豊かな農村風景や金山建築の街並みにあるだけではなく、地域に強い愛着を持つ町民、またその中に、〝行動するアイデアマン〟がたくさんいることにある。

では次に、金山町の地域再生を支える具体的な取り組みを三つばかり紹介してみよう。

地場直産が自立するための〝心〟

金山には『夢市（ゆういち）』という、地場直売の七人のグループがある。発足から二十五年経った今、メンバーの平均年齢は五十歳代半ば。何と、年商は五千万円にもなる。だが、ここまでの道のりは、決して楽ではなかった。

金山町は、八〇年ごろまでは米作や畜産で栄えていたが、国のコメ自由化政策と減反による転作に加え、輸入肉の影響もあって、農家数は最盛期の八割にまで減少している。八〇年代当時の転作田には何か植えなければならず、農家は半ば強制的に野菜自給運動をやらされた。しかし、「タダ」でも貰い手はなく、多くの農家が生計が立たずにやめていったという。この時代に補助金で建てた牛舎や一部のハウスなどは廃屋化が進み、『夢市』のリーダーによれば「国から持って来られた手法に現場の農家が付いていけず、補助金行政に農家は疲れていた」そうである。

『夢市』の前身が発足したのは、七九年。当初は三十人程度の農家の女性たちが農協の「売り出し」の時に作物を持ち寄っていたが、たいした収入にもならず、八〇年代半ばには僅か五人にまで減ってしまう。

農家全体に逆風が吹いていたある時、おばあちゃんたちが自分たちの手作りの漬物や塩蔵物、餅の加工品などを売ってみたところ、大人気であることが分かる。加工品であれば、小さかったり形が悪かったりで市場に出せない野菜でも余すことなく利用できる。必要以上に野菜を作って無駄にすることもなく、新鮮野菜の売れ残りを捨てたり

することもなくなる。また、『夢市』のおばあちゃんたちの味は、スーパーの商品と違って「加工品でも新鮮で、辛過ぎない」と次第に評判が広がっていった。今では、おばあちゃんたちのアイデアで、年間を通して加工品が作られ、その数は百八十品目に上る。

新庄市や山形市といった近隣の都市では、週一回の市を楽しみに待つファンが着実に増え、固定客が六～七割を占める。また、かつて東北の農家は冬場の収入が少なかったが、『夢市』の農家の収入は通年で安定しているのも興味深い。

『夢市』の活動は今では、①直売（青空市）：金山町で週一回（金曜日）、新庄市で週二回、山形市で月二回以上（合計で年間百二十日）②学校給食：保育園や小・中学校給食向けの配食センターに食材供給③通販（おむすび会）：直売で評判の良い商品を「郵パック」で配送。金山出身者からの利用が多い④イベント、祭・行事：弁当、おにぎり、笹巻き等の販売、餅つきの実施――のような多角的な展開を見せる。

ここで、小さなアイデアから始まった着実に成長する商売について、二十五年以上も手掛けてきた『夢市』のリーダーが語った興味深い話を二つ紹介したい。一つは、「小さな百姓集団の自創自給」という哲学。こうした起業には、一気に儲けるのか、まずは自分や地域の暮らしを豊かにするのか、という視点の決定が大切だと言う。彼らはもちろん後者である。〝無理をせず、無駄をせず〟の基本的な考え方は、メンバー全員を大事にするチームプレーにも反映される。一般的な市場では、自分の商品を売れば終わりだが、『夢市』では交代制で市に立つメンバーが、みんなの商品を分け隔てなく売り捌くという暗黙のルールがある。そうなると、「自分の商品よりも、仲間の商品を先に売る」という責任感が次第にわいてくるというのである。「生産管理は個人、商品管理は個人＋夢市、販売管理は夢市全体」――。これが直売成功の秘訣だそうだが、実は「人の心」の在り方に因るため、簡単に模倣できる手法ではない。

二つ目は、経営感覚について。市を開始した当初は、生計の足しになれば……という程度。少し売れてくると「面白さ半分」もあったが、今は、「農業（生産者）と市（消費者）とを一体化させている」という経営感覚の下で実施している。その〝つなぎ役〟として大事なのが、単にものを売るという発想ではなく、売り手と買い手との「心を大切にした交流」とのこと。これも、二十年以上も紆余曲折し、仲間たちと素敵な生き方を築いた、実行者ならではの言葉だ。

〝住み続ける夢〟を次世代に見せる

金山町には三十一の地区がある。次に紹介する活動の舞台である杉沢地区は、奥羽山脈（神室山系）から流れ出る川沿いの二・五㌔に十四戸が点在する、同町のいちばん山奥にある小さな集落である。住戸数が減り続けるという現実を抱えながらも、同地区は心豊かなグリーンツーリズムのメッカとして全国的に知られ、全国から集まったファン二十人以上が、空き家を利用して共同出資・運営のセカンドハウスづくりに取り組むような動きも出ている。とにかく、杉沢の小さな集落では、衰退の〝暗さ〟は見られず、〝夢追い人〟たちが山村の暮らしを楽しんでいる。

話が少し横道にそれるが、ここでマクロな農林業問題を考えれば、後継者不足問題が論じられて二十～三十年になるものの、一向に改善の気配はない。日本の農業政策は、作物の生産規制や農業施設の規格、あげくは農地の使い方にまで全国一律の手法が指導され、地域性や気質を活かした農業者自らの市場分析や責任・判断によって生産・流通体制が築かれることはなかった。最近になって〝新しい農業の担い手〟としてチャレンジする若い農業経営者が現れてきたが、一般的には「生産量＝収入」と考えてきた農家世代で子どもたちに農業を継がせたいと考える親は少なく、農業を継ぎたくない（農業では豊かになれない）と考える子どもたちはさらに多いのが現実だ。日本では、農業に関する中央集権的・画一的な価値観と手法（細かな補助金による制約）を是正しない限り、小さな農山村集落が独自に生き残ることはできないだろう。

杉沢地区のリーダーが主催する『暮らし考房』の取り組みは、過疎化が進行する中、九〇年代中ごろから「自分たちはここに住み続ける」という

強い決意の下に始まった。それまでも、コメ作りや炭焼き、酪農、キノコ栽培などを多角的に手掛けてきたが、一般市場での価格競争では〝勝ち組〟にはなれなかった。「どうやって生活基盤を築くか」についての十数年にわたる模索。地域性を大切にして生き続けている、欧州の農山村にも出掛けて行った。

そこで得た答えは「何も、兼業してたくさん稼ぐ必要はなく、この土地に住み続ける覚悟さえあれば、農林業だけで心豊かに暮らしていける」「その代わり、自分たちが好きなことにチャレンジしていこう」だった。また、山村の過疎の暗いイメージを払拭し、自分たちの暮らしを全国の人たちに体験してもらい、山村が存在する価値を理解してもらえれば……という前向きな気持ちから、「森の案内人」などの活動も展開。国の補助金を入れた交流事業では、「迎える側」のアイデアや気持ちに〝もてなし〟や〝真剣さ〟が宿らないとして、すべてを自前の取り組みとして開始した。

リーダーたちの心意気と清々しい取り組みは、多くの来訪者からの評価を得ただけでなく、地域の人たちの気持ちにも大きな変革をもたらした。周辺の集落で、自分たちも「何かできる」と気付いた人たちが、少しずつ〝行動〟を起こし始めたのである。取り組み開始から十数年経った今では、**図表5―4**のような多様な活動が、個々の農・林業家あるいはその共同体によって展開され、来訪者の根強い人気と全国からの応援者を集めている。

当然のことながら、農・林業家の若者たちの関心事も変わってきた。来訪者の視線を受けながら森と接する機会が多くなるにつれ、木の育て方や枝打ちや測樹の方法から学び直したいとの声が上がった。森林保全の活動とともに、それらを資源として活用した森林ガイドの取り組みも始まり、二本立ての活動（生業）として回り出した。

筆者も、リーダーのログハウスで初夏の緑の風を感じながら、森に自生するイタヤカエデの樹液から作ったメープルサップ（甘い飲み物）を頂き、都会とは時間の流れも〝生きること〟への価値観も異なる山村の暮らしについてお話を伺った。その中で、「地方の農山村では、多様な生き方を認めていかないと地域全体が生き残れない」という言葉が特に印象深く残っている。それは、筆者も、中央集権や補助金行政といった政治・経済の問題だけではなく、戦後一貫して国民に一律の価値観を植え付けてきた経済重視志向と偏差値教育の方がむしろ大問題（〝人〟の問題）だとずっと考えてきたからだ。日本社会は多様化が進んだといわれる。しかし、市場や生活スタイルでは確かに多様化が進んだものの、〝価値に対する考え方・認め方〟は「中央から見た尺度」が支配的であり、今でもかなり横並びで画一的だ。だから、次世代を担う若者たちには、新しいことにチャレンジする気持ちや、失敗を恐れない勇気、自分の足元からゼロベースで考え行動する〝逞しさ〟が育っていない。今や、次世代までが「すぐにお金（生活

図表5－5　「四季の学校・谷口」のカリキュラム（2004年）

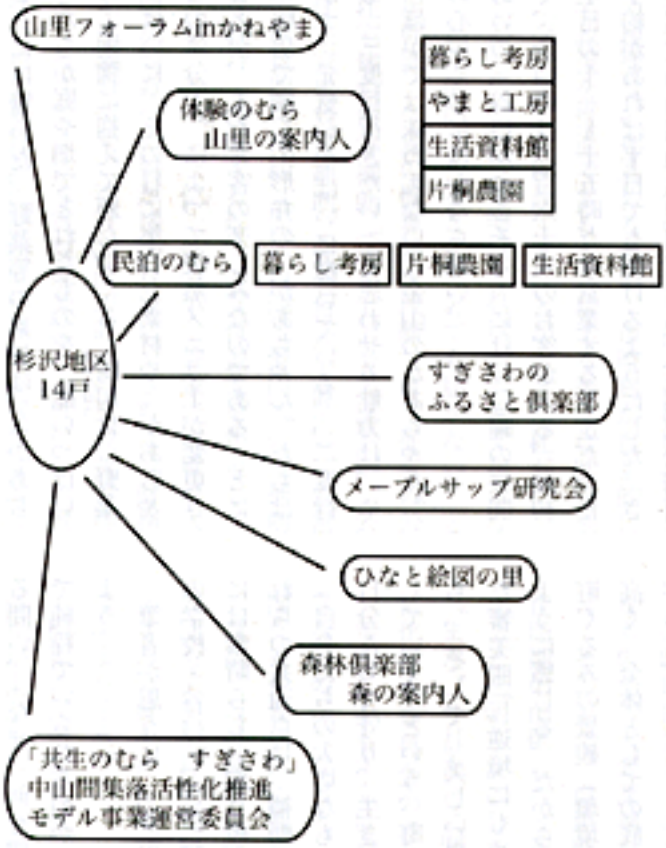
冬のカリキュラム	春のカリキュラム	夏のカリキュラム	秋のカリキュラム
2004年2月14日（土）～2月15日（日）	2004年5月29日（土）～5月30日（日）	2004年8月7日（土）～8月8日（日）	2004年11月13日（土）～11月14日（日）
・校舎周辺の除雪作業 ・かまくらづくり ・鍋食い道楽 ・スノーモービル ・スキー ・料理講習	・校舎周辺の草刈り・草取り ・なめこを原木へ植菌 ・山菜取り、山菜料理 ・花壇づくり ・畑作業	・校舎周辺の草刈り・草取り ・泥んこ運動会 ・蕎麦の種蒔き ・川遊び ・暑中見舞い書き ・校舎の外壁ペンキ塗り ・バーベキュー、すいか割り ・花火、星空観察、肝試し	・なめこ収穫（春に植菌） ・蕎麦の収穫（夏に種蒔き） ・桜の木の雪囲い ・ブナ林の遠足

※　1回当たりの参加費は、大人（中学生以上）は6000円、子ども（小学生）は3000円、幼児は無料。
四季すべてに参加することで卒業できる。『自遊自学』を理念に、自分たちで生活をすることが基本。

費）を稼げる既存の雇用の場」を求めて、どんどん地方の町村を捨てているのが現実だろう。

その現実を横目に、杉沢のリーダーが提起された重大な視点は、「今後の若者の選択は、飯が食えるかどうかよりも、自分に合っているかどうか（で決まるよう）になるだろう。農林業の後継者が育たないのは、現役世代の農林業者の背中を見て育ったから。現役（四十～五十歳代）が次世代に何を見せられるか（が課題）」というものだった。杉沢地区では、国の補助金など当てにしていない。これからは、集落で始めた森林活動を見て新たな勉強を始めた若者たち、サラリーマンをやめて集落に戻ってきた若者たちと一緒に、自然と共に山村で生き続ける価値を創り出し、集落がある限り発信し続けていくとの決意がある。

図表5－4　山里の自創自給の暮らし
「共生のむら　すぎさわ」



“かあちゃん”たちの心尽くしが価値

金山町に点在する“輝く取り組み”をもう一つ紹介しよう。〇四年六月、政府により「立ち上がる農山漁村」の三十事例に選ばれた『四季の学校・谷口』と『谷口がっこそば』である。「がっこ」とは、その響きが物語るように、山形弁の「学校」のこと。一九五〇年に建てられ、文化活動の拠点として地域とともに歩んできた金山小学校の谷口分校が、半世紀後の九六年に閉校となった。戦後のピーク時の全校生徒数は四十三人であったが、少子化に歯止めが掛からず、九六年には十人を割り込んだのが原因だった。地区住民の間で廃校舎利用の話し合いを重ねたが、土地が個人所有の上、町が所有する建物の維持・管理費の問題が決着できず、話は何度も取り壊しの方向に傾きかけた。しかし最終的には、地区で本格的に活用方策を検討する委員会が立ち上がり、維持・管理費等のすべての責任を地区住民らによる運営委員会で持つことで決着。町民たちの、この勇気と（文化・歴史への）優しさある落しどころは、ほかではなかなか模倣できないであろう。

ただし、廃校を利用して行う事業にはリスクもあり、“地域ぐるみで”とはならなかった。結局、「（事業費を）負担してでも、廃校を残すために何かやりたい」という有志だけが集り、とりあえず、翌年の九七年から「四季の学校」と蕎麦屋をスタートさせた。前者は、農業・農村体験教室として季節ごとに年に四回、一泊二日で開催する（**図表5－5**参照）。会員制だが、子どもから高齢者までが生徒として参加するようになり、リピーターも増加。毎年仙台から参加する生徒たちにより、仙台分校まで開設されたほどの人気である。

実は、この人気を支える理由の一つに“かあちゃん”たちによる『谷口がっこそば』がある。蕎麦屋の取り組みは、当初、建物の維持・管理費や地代などの経費捻出の手段として計画された。しかし、“手打ち”を掲げても、蕎麦粉の扱いも手打ちの技術も分からず、客がどれだけ来るかの見当すらつかない手探りのスタートとなった。

筆者は一度、本誌の取材でなく『谷口がっこそば』を訪れている。その時に、「そば三昧」というお薦め料理を頼んだのだが、次から次へと出される“地の物”尽くしと、蕎麦はもちろん、すべての料理が原材料からの手作り……という“おも

てなし”には驚いた。野菜等の素材は、“かあちゃん”たちが庭や畑でとれたものを、籠いっぱいに詰めて両腕に抱えて運んでくる。厨房は、野菜でいっぱいに。その日に集った素材や“かあちゃんたちの気分！”によって突然メニューが変更されることが、またお客の楽しみなのである。とにかく、厨房で働く山形弁の“かあちゃん”たちは賑やかで、元気いっぱいに輝いている。「二度行っても、三度目行きたい」と思わせる魅力は、やはり、ほかでは味わえない“金山のかあちゃん”たちの心尽くしにほかならない。

山あいの『谷口がっこそば』には、日曜の昼間だけで、多い時は二百六十人のお客が入る。最初は、土日の十一～十五時だけ営業する予定だったが、予約があれば平日でも開けるようにした。さらに、町役場の協力（推薦）もあり、国家公務員や海外からの研修の場としても広く利用されるまでになった。いきなり、他所から人が大勢押し寄せたことへの“かあちゃん”たちの驚きや戸惑いは、今ではすっかり喜びに変わったようだ。

二〇〇〇年の後半には、自然体験の学校と蕎麦屋の取り組みは、早くも軌道に乗った。廃校利用は全国的にも数多く行われているが、こんなに賑やかで明るく楽しい場所として「農業・農村体験教室による交流」が成功している例は珍しい。

金山の自治に思う

ここで、筆者自身が冒頭に発した、金山に対する問い、「なぜ、何を信じて、地域の人がここまで純粋でいられるのか」――への答えを考えてみよう。

筆者が思うに、『夢市』や『暮らし考房』『四季の学校・谷口』『谷口がっこそば』など、金山町には素晴らしい取り組みが多く点在している。それらの共通点は、補助金や公的な助成に依存せず、「自分たちの大切なものは、リスクを負ってでも自分たちで守り、生きる価値は自分たちで創り出していく」という、町民の“地域を想う強い気持ち”、そして“美しい自然と金山杉文化に培われた審美眼”“逆境にもめげない自立精神”であるように感じる。だからこそ、冒頭で述べたように、町ぐるみの景観（環境）づくりでも個々の意識が高く「全体としての底力」を発揮できるのも納得がいく。

この町民の決意の深さ、重さにこそ「生きる力」が宿っているのであり、筆者はそこに地方分権の原点があるような気がしてならない。

しかし一方で、輝く取り組みのリーダーたちの世代は五十歳代に達しており、二十～三十歳代は働き先を町内で見つけることも難しく、今の十歳代や子どもたちが自立する十五～二十年後には、さらに若者の流出が進むことも予想される。農林業が主要産業とはいっても、サラリーマンとの兼業でなければ生活が成り立たない現状では、“農業のプロ”としての意識を持つことはなかなか難しい。今年で二十三回目を迎えた金山町の五地域ごとの自治集会（地域公民館大会）の活動も活発ではある。しかし、都市部か地方の町村部かを問わずに全国の自治会・町内会が抱えている問題と同様、出席者の高齢化・固定化も進む。二十～三十歳代の意識は、どこか地域コミュニティーから離れつつあるのも事実だろう。

〇四年六月。金山町は町民、議会、行政の各レベルにおける膨大な議論を経て、「合併しない道」を選んだ。しかし、地方交付税が歳入の51・4％を占めるという厳しい現実もある。

「あと五年、十年は、金山は美しい町として生きるでしょう。でも、次々世代の人の働く場所がなく、若い人たちが生計のために町を離れていったら、二十年後には皆さんが築いてきた美しい町を、“誰が”守るのか」――。これが、心苦しくも、地域経営アドバイザーとして金山に入った筆者の、町民への最初の厳しい問い掛けであった。この美しい町も例外ではない、実に悲しい、“日本の地方の現実”である。

「町は今、転機。二十年後、次々世代が“外貨”を稼げる雇用を、町民が創れるか」――。筆者は、夜、地区の集会、女性町民集会、農業者の集会などで、町民の方々と真剣な議論を繰り返した。「町が生きるためなら、私たちにできることはやる」との町民の答えを形にし、継続できるようにするまでは多難である。だが、金山町なら絶対にやれる……。そう信じたいし、応援したいと思うのは、筆者だけではないだろう。